

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 169号

平成28年 5月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (1)

1月4日

わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。兄弟たちよ、わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。(ピリピ書3・12-14)

キリスト信者は後を見ない。前(さき)を見る。彼は最善を過去に探らない。未来に求む。彼が歴史を学ぶは、理想を古人に求めんがためではない。永遠の生命の起源を尋ねんがためである。彼が待ち望む神の国は、最後に来たるものである。それまではすべてが準備である。…「われらの国は天にあり。われらは、救い主すなわちイエス・キリストの、そこより来るを待つ」(ピリピ3・20) というのがキリスト信者の生涯である。ゆえに彼はおのずから理想家である。

夢見るものである。過去現在をもっては満足するあたわざる者である。永久の青年である。前へ前へと進む者である。墓や石碑を嫌うて、天国の歌に酔う者である。

1月7日

こういう訳で、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。(ローマ書8・1-4)

われは日々に自己(おのれ)を省みず。われは日々にわが主を仰ぎまつる。われはわが内に何の善き事をも発見するあたわず。わが善はすべて「キリストと共に神の中に隠れあるなり」(コロサイ書3・3) 我の汚れたるは悲しむに足らず。神はその聖きをもって、われを聖めたもう。われの愚かなるは嘆くに足らず。神はその慧(さと)きをもってわれを慧くしたもう。われは、おのれに省みて下り、神を仰ぎ見て、のぼる。あたかも日光の、我を天に向けて引き付けるが如し。われ、主を仰ぎ見て、我が信仰の翼は張りて、わが身は地を離れて、主の宝庫(みくら)に向かつてのぼるごとくに感ず。

1月9日

主は霊である。主の霊のあるところには、自由がある。わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。(コリント第2書3・17-18)

まず第1に理想がなくてはならぬ。そうしてこれを実現するの力がなくてはならぬ。クリスチャンの理想はキリストである。そうして実現する力は聖霊である。クリスチャンは一意専心にキリストを見つめる。されども、見つめるのみにては彼は神の子とならない。聖霊は彼の内に働きて、彼が見つめつつある聖善の美をおのがものとならしめたもう。パウロが言えるごとく、われらクリスチャンは主キリストの姿を我が良心の鏡に映し、これを見つめて、その同じ姿に変わる。そうして主なる聖霊はわが内にありてこの事を行ないたもう。我らの前に模範の供せらるるあり、これにかなわんがための霊能の注がるるあり。福音はまことに完全である。ただに無益に夢想するのではない。ただに追求するのではない。終局と、これに達するの道と力が同時に供せらるるのである。

1月13日

地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。主はその基を大海のうえにすえ、大川のうえに定められた。主の山に登るべきものはだれか。手が清く、心のいさぎよい者、その魂がむなしい事に望みをかけない者、偽って誓わない者こそ、その人である。…（詩篇 24・1-5）

余は間暇（ひま）さえあれば読書にふけている。余はもちろん読書は特別の美德であるとは信じない。読書は余にとりては一つの道楽である。しかり、唯一の道楽である。しかし、読書は道楽であるが、悪い道楽ではないと思う。これによって、多くの無益の書と少なからざる有害の書を読むの害はあるが、しかし時には有利有益の書に接して、心に無限の快楽を感ずることがある。世に快楽の種類は多いが、真理を発見した時にまさるの快楽はない。その時われらは宇宙をわがものになしたるように感ずる。おのれ陋屋（ろうおく）にありて一人の貧生であるにかかわらず、王子か貴公子になったように感ずる。しかしてこの快感がほしさに、毎日毎時、書籍をあさるのである。あたかも墨川（ぼくせん）に釣（つり）を垂るる者のごとく、獲物のまれなるは覚悟しつつ、得た時のうれしさが忘れられずして、真理の漁労に従事するのである。

1月15日

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」。ピリポはイエスに言った。「主よ、私たちに父を示して下さい。そうして下さいれば、わたしたちは満足します」。(ヨハネ伝 14・6-8)

人生の目的は神を知るにある。その他にない。金をためるのではない。人にほめられるのではない。哲学と美術を楽しむのではない。神を知るにある。これが人生の唯一の目的である。この目的を達せずして、人生は全く無意味である。ほんとうの夢である。この目的を達せずして、最も成功せる生涯も失敗である。われらは年の初めにあって再びこのことを深く心に留むべきである。

1月16日

人の歩みは主によって定められる、人はどうして自らその道を、
明らかにすることができようか。(箴言 20・24)

神様、私になさんと欲することは成りません。また他人（ひと）が私をもってなさんとする事も成りません。ただ貴神（あなた）が私をもってなさんと欲し給う事のみが成るのであります。神様、ドウゾ貴神が私をもって何をなさんと欲し給うか、その事を教えて下さい。ソウしてその事の私にわかった以上は、私が、私に力のあるとないとを顧みることなく、また他人に何の遠慮することなく、ただ大胆にその事に従事することのできるように私を助けて下さい。アァメン。

1月17日

わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるがあるが、すべての物を持っている。(コリント第2書6・8-10)

クリスチャンはキリストのしもべである。おのれに死して、キリストが彼に代わりて彼の内に生きたもう者である。かくのごとくにして、クリスチャンは規則の人ではない。意志の人ではない。また思惟の人ではない。情の人である。しかも清められたる情の人である。ゆえに彼は、教会者には気ままの人のごとくに見える。道徳家には非倫の人のごとくに見える。哲学者には無学の人のごとくに見える。しかしながら彼は自由の人であると同時にまた束縛の人である。意志の人であると同時にまた情の人である。学究の人であると同時にまた歌の人である。クリスチャンは、生けるキリストがその内に在りて働きたまう者たるよりほかの者ではないのである。

1月18日

わが子よ、聞け、わたしの言葉を受け入れよ、そうすれば、あなたの命の年は多くなる。わたしは知恵の道をあなたに教え、正しい道筋にあなたを導いた。あなたが歩くとき、その歩みは妨げられず、走る時にも、つまづくことはない。教訓をかたくとらえて、離してはならない、それを守れ、それはあなたの命である。(箴言4・10-13)

まず第一に信仰の人たれよ。信仰は人格の骨子なり。信仰なくして、人は道徳的無脊椎動物と化するなり。

第2に知識の人たれよ。知識は神を見るの能力(ちから)なり。知識によらずして、広く深く神を愛するあたわず。

第3に健康の人たれよ。肉体の健康はもちろん信仰を曲げてまでも保持するの価値あるものにあらず。されども百年に満たざるこの生命もわれらにとりてはまた永生の一部分なり。これを善のために使用して、でき得るだけ長くこれを楽しむは神の聖旨なり。われらは生くる間は勇ましく生きて、勇ましく死するための準備をなさざるべからず。

信仰と知識と健康、この三つのものは常に貴し。しかしてその内最も貴きものは信仰なり。

1月23日

人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ。(箴言 19・21)

おのが天職を知らんと欲する者多し。言う、われにしてもしわが天職を知るを得んか、われはわが全力を注ぎてこれに当らんと。

人よ、なんじはなんじの天職を知るを得るなり。なんじは容易にこれを発見するを得べし。

なんじの全力を注ぎて、なんじが、今日従事しつつある仕事に当たるべし。さらば遠からずしてなんじはなんじの天職に到達するを得べし。なんじの天職は、天よりの声ありてなんじに示されず。なんじはまた思考を凝らしてこれを発見するあたわず。なんじの天職はなんじが今日従事しつつある職業によってなんじに示さるるなり。なんじは今やなんじの天職に達せんとしてその途中にあるなり。なんぞ勇気を鼓舞して進まざる。なんぞ惰想にふけりて天職発見の時期を遅滞せしむるや。知者あり、曰く、

すべて、なんじの手に堪うることは、力を尽くしてこれをなすべし(伝道の書 9・10)と。このほか、別に天職発見の道あるなし。平々坦々たる道なりといえども、その終点は希望の町なり。感謝と歓喜の都なり。

1月27日

たとい、私たちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである。(テモテ第2書2・13)

神は誠信(まこと)なりという。祝うべきかな、この言や。神は誠信なり。ゆえに変わりたまわない。彼はその計画したまいし事を必ず実行したもう。彼がわれらをその子イエス・キリストの交際(まじわり)に召きたまうのである。しかり、「彼」である。われら自身ではない。われらの意志または決心または努力ではない。ゆえに、われらは安全である。われらの救いは保証されたのである。「汝らを召く者は誠信なり。彼、この事をなしたまわん」(テサロニケ前書5・24)とあるが如し。しかるがゆえに、人も悪魔も、政府も教会も、帝王も監督も、天の権能も地の勢力も、しかり全宇宙そのものも、われらを神の愛より離らせ、われらの救いにかかわる彼のご計画を失敗無効に終わらしむることは出来ない。神は誠信である。ゆえにわれらが救われる希望は确实(たしか)である。われらの不信、誤謬、不完全、たびたび犯す罪、落ちいる墮落、すべてこれあるにかかわらず、われらが救われるは确实である。

1月31日

主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いにくずおれた者を救われる。正しい者には災いが多い。しかし、主はそのすべての中から彼を助け出される。(詩篇 34・18-19)

人々に臨む患難は種々さまざまである。しかして各自に臨む患難は、その人にとり必要欠くべからざる患難である。彼を清め、彼を錬(きた)え、彼をして神の前に立ちて完全なる者とならしむるために、ぜひとも望まねばならぬ患難である。かくのごとくにして、ある人は家庭の患難を要し、ある人は病の患難を要し、ある人は失恋の患難を要し、ある人は貧困の患難を要し、ある人は失敗落魄(らくはく)の患難を要するのである。人各自の悩む病に従い特殊の薬を要するが如くに、各自の欠点を補うために特殊の患難を要するのである。患難は前世の報いではない。来世の準備である。刑罰ではない。恩恵である。われはわれに臨む特殊の患難によりて、楽しき神の国に入るべく磨かれ、また飾られ完全(まっと)うせらるるのである。されば人は何びとも彼に臨みし患難を感謝して受くべきである。